

フィリピン台風ハイエン被災者支援活動

完了報告書

(2013年11月～2014年8月)



公益社団法人
シヤンティ国際ボランティア会

私たちは向き合います。苦難の中にいる人々と世界に。

〒160-0015 東京都新宿区大京町 31 慈母会館 2・3 階

Tel: (03) 5360-1233, (03)-6457-4586 Fax: (03) 5360-1220

緊急救援室: 木村万里子、長沢有華

2014年8月、シャンティ緊急救援室は10ヵ月にわたった支援活動を終了しましたので、ここにご報告致します。

2013年11月8日、フィリピン中部を超大型台風ハイエン(台風30号)が襲いました。被災者は、2014年4月3日時点で1,600万人を超え、死者は6,293名、未だ1,061名が行方不明となっています。台風により、津波のような高潮が沿岸部を何度も襲ったこともあり、死者は実際には1万人を超えるのではとも言われています。フィリピン全体では440万人以上が避難を余儀なくされ、強風や高潮による家屋被害は全半壊合せて約114万棟、多くの方が家を失いました。

台風が最初に上陸したサマール島、直撃した時間帯は早朝で、勢力を弱めることなく、約一日半かけてフィリピン中部を横断しました。最大瞬間風速は秒速90メートル、竜巻のような強風をもたらしました。現地公用語には「高潮」を表す言葉はなく、メディアや防災関係者は英語の「Storm Serge」をそのまま使い警告したため、多くの住民がその意味を理解することなく、被害拡大につながったとも言われています。



11月26日、初動調査にて最初に訪れた、東サマール州エルナー二町の沿岸部。家の枠だけが残ри、見渡す限り平らな風景は、東日本大震災の津波被害を受けた沿岸部を思い出しました。



11月27日、東サマール州キナボンダン町を走る車の中から撮った風景。

主要産業であるココナツの木々が壊滅的な被害を受けていました。再生には少なくとも5年~10年はかかると言われています。

活動①:初動調査、生活支援パックの配布 2013年11月22日～2013年12月8日

シャンティ緊急救援室は11月22日からスタッフ3名を派遣し、初動調査及び460世帯に対して生活支援パックを提供しました。調査対象地域として選んだのは台風が最初に上陸したサマル島の東サマル州。島自体へのアクセスがもともと悪く、島内も国道が一本のみで、移動手段の確保に頭を悩ませられました。また、東サマル州はフィリピンの中でもミンダナオに次ぐ最貧困地域とされています。尚、本調査は、ジャパン・プラットフォームの助成金を受けて実施しました。



エルナーニ町にて、高潮で流されそうになりながらもヤシの木にしがみついていたとか生きながらえたという、エスカランテさん(70歳)に江口スタッフがインタビューをしているところ。途中、雨が降り出すと表情が陰しくなったのが印象的でした。



キナポンダン町の町役場にて社会福祉課のアレハンドロさんに被害状況を伺っている白鳥スタッフと長沢スタッフ。電気が止まってしまった中、役場に届けられた大量の物資の管理を行うのも手一杯という状況でした。屋根の材料となるタン板への要望が強く聞かれました。

住民の方々にインタビューする中で聞かれたニーズを踏まえ、現地パートナー団体である西サマル開発財団(以下、WESADEF)とともに、エルナーニ町460世帯に対して、お米や調味料、調理道具、衛生用品などをひとつにまとめた「生活支援パック」を提供いたしました。大雨の中行われた物資配布でしたが、皆さん笑顔で「Salamat!!(サラマート、現地語でありがとう)」と言いながら受け取っていただきました。



小さい子どもからお年寄りまで、7～8kgある生活支援パックを一つ一つ手渡ししました。



コンソルタード家の皆さん。中央にいるお母さんは、インタビューの際に嬉しさのあまり涙を流されていました。

活動②: 緊急支援物資配布事業 2013年12月9日～2014年2月28日

初動調査での結果を踏まえ、東サマール州の中でも人的被害が少なかったことから、支援から取り残された町の一つキナポンダン(Quinapondan)町への支援を決定しました。支援内容は、家屋修理・再建に必要な工具(かなづち、のこぎり)と屋根の材料となるトタン板、壁等に用いられる合板、屋根用の傘釘と2インチ、4インチの釘をセット。対象としたのはキナポンダン町でも沿岸部や山間部に位置し、家屋被害が最も深刻とされていた16村2,152世帯へ配布しました(ジャパン・プラットフォームの支援を受けて実施)。

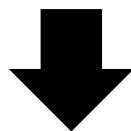
2014年1月上旬 トタン板と合板の積み下ろしと数の確認



積み下ろしと数の確認作業。トタン板 13,000枚、合板 4,300枚、これだけで丸々2日かかりました。



合板の上で遊ぶ子どもたち。カメラを向けるとすぐにポーズをとってくれます。



2014年1月上旬 トタン板と合板の配付



トタン板と合板の配付。村の男性ボランティアが手伝って下さったおかげでスムーズに進みました。バイクの後ろに代車を付けたトライシクルに乗せ、ご近所の方の分も乗せられるだけ乗せて、運んで帰られました。

2014年1月中旬 釘をくるむ作業



トタン板と合板は予定通りに調達できたのですが、そこから約2週間、待てど暮らせど届かない釘・・・ようやく届いたかと思えば、一週間かけて1kgずつ新聞紙にくるむ作業。そして、かなづち・のこぎり・釘3種を1セットにしたカラフルなバッグが事務所を埋め尽くしました。ボランティアの皆さんに心から感謝です。

2014年1月中旬 工具と釘を配布



いよいよ工具と釘の物資配布。10トントラックに村のボランティア数人が乗り、村長から名前を呼ばれた人に手渡していきます。この日は町がカラフルなバッグを持った人でいっぱいになりました。

2014年2月上旬 モニタリング



◆現地からの声◆



台風で屋根は吹き飛ばされ、とても住むことができませんでした。避難している間に子どもが生まれ、何もかもが流されてしまった中で、ビニール袋で子どもを包み、温めていました。自分たちでは絶対に買うことができなかった工具と材料です。家が完全に修理できそうです本当にありがとうございます。

(マリア・パルシアさん)



なぎ倒されたココナツの木で自宅は全壊してしまい、知人の家に二週間くらい避難させてもらっていました。

自宅のある場所で家を建てなおそうと思った時に、こういった支援をいただけて本当に嬉しいです。屋根があると安心できます。心から感謝いたします。

(ジーナ・エラシオンさん一家)

From the People of Brgy. Sta Cruz,
Quisapondan Eastern Samar.
We are addressing to ^{the} Japanese People:
We would like to say
THANK YOU SO MUCH!!!
for all the support you have
given to us.
maraming salamat po!
and REGATO!

配付先の村の一つ、サンタ・クルズ村の役場の皆さんから、感謝のお手紙をもらいました。

「サンタ・クルズ村の住民より、私たちのため皆さんがしてくれたことへ心から感謝します！アリガトウ！」



配付の調整にあたり、大変お世話になった社会福祉課の皆さん。中央に座る唯一の男性が担当のアレハンドロさん。訪問するたびに、お得意のジョークを言ってくれます。

活動③:復興支援事業 2014年3月1日~2014年8月31日

東サマール州キナポンダン町の5つの村にて、台風で被害を受けた、就学前(3~5歳児)の子どもたちが通うデイケアセンター(日本の幼稚園のようなもの)の建物の再建および修復を行いました。2月中旬の調査時に訪れた全壊したサンタ・マルガリータ村では、子どもたちは建物の横にテントを張り授業を受けていました。建物が半壊と報告されていた村では、屋根や壁に穴が開き、扉が外れてしまっているなど、とても安心して授業が受けられる状態ではありませんでした。

また、対象となるデイケアセンターに通う子どもたちとその親に対して、台風によるトラウマを乗り越えるためのプログラムを各村で4セッションずつ行いました。現地パートナー団体であるWESADEFが通常事業で実施している、性的虐待や暴力の被害を受けた子どもたちやその家族を対象としたプログラム内容を応用し、災害後のトラウマケアプログラムを作成しました。子どもたちは、様々なアクティビティを通じて、感情を理解すること、トラウマ経験からの回復、自信をつけることなどを学びました。親たちは、ストレスとその状況下での児童虐待の危険性、コミュニティの回復力を高め、お互いに助け合うことができる仕組み(Community Resiliency Model/略称 CRM)を学び、その実践を通して、自然災害後のストレスのかかる状況下での対処法について学びました。



2月中旬、調査に行った時のサンタ・マルガリータ村のデイケアセンター(写真上段)、そのすぐ横に立てたテントで授業を受ける子どもたち(写真右下)。雨が降る授業はキャンセルになるとのこと、デイケアセンターの先生が頭を悩ませていらっしゃいました。写真左下はサンタ・クルズ村の半壊したデイケアセンター。



2014年3月から4月にかけては、壊れた屋根や壁を崩す作業、掘削作業などを行いました。



2014年4月から5月は内装やトイレ、外壁の塗装作業などを行いました。村の方々の提案で、建物の周りに草花を植えました。



2014年6月に完成したデイケアセンター。カラフルな建物は外からも良く目立ちます。



子ども向けのトラウマケアプログラム。アクティビティを通じ、自分の体の変化に気づきます。



ブロックや粘土を使ったアクティビティ。感情をものでも表してみます。



親向けのプログラム。子どもと同じアクティビティもありますが、グループに分かれて話しあったり、気持ちを共有する時間を持つことで、信頼関係を築きます。

◆現地からの声◆



今回は、私たちの村のデイケアセンターの修理をしていただき、本当にありがとうございました。村の子どもたちはカラフルに塗られた建物を見て、早く新学期が始まってほしいと言っていました。

(サンタ・クルズ村村長 ロヘリオ・ナポトさん)



私は親・子両方のセッションに参加させていただきましたが、私自身にも大きな学びの場となりました。新学期に向けて、子どもたちも親たちも心機一転、気持ちを新たにすることができました。にありがとうございました。

(サンタ・マルガリータ村 デイケアセンターの教員
ロセンド・アブレテスさん)

災害のトラウマケアは今回初めてだったので、セッションを実際にやるまでは、村の人たちが自分たちを受け入れてくれるのか、参加者が積極的に参加してくれるのか、とても不安でした。最初のセッションでは、参加者がシャイでなかなか意見を聞き出せないこともあり、特に、一番最初の自己紹介が大変でした。ただ、回を重ねることで信頼関係ができてきたこともあり、参加者がどんどん積極的になっていきました。それでもシャイでうまく話せない方はいましたが、雰囲気作りを大切にすることもあり、最後はみんなが一体となってセッションを行うことができました。



私たちは台風があったことでたくさんの方を失いましたが、台風がなければ皆さんとの出会いも、皆さんからの温かいご支援もいただくことができませんでした。そして村の人々は、そういったありがたいご支援に対して、感謝する気持ちを持つことができました。辛い経験ではありましたが、この経験を乗り越え、さらなる復興を目指していきたいと思えます。

(WESADEF のソーシャルワーカー
写真左: ジョセリン、右: レイア)

西サマール開発財団(Western Samar Development Foundation, Inc. 略称 WESADEF)について

西サマール開発財団(Western Samar Development Foundation, Inc.)は、1987年5月に設立されたサマール島の貧困地域での開発支援を行う団体です。西サマール州カルバヨグに拠点を置き、同地域において主に虐待された子どもたちのケアや家族への支援、有機農業などの農民支援のプログラムを行っています。Caucus of Development NGO Network (CODE-NGO)加盟のフィリピンNGOであり、2011年には在マニラ日本大使館の助成案件で虐待された女性たちのためのリソースセンターを設立しています。

シャンティとWESADEFは今回の台風ハイエンで初めて協働しました。西サマール州は台風が直撃したわけではありませんが、強風と大雨の影響により、電気や水道が数日間止まってしまった中、東サマール州への調査や支援活動を行っていました。WESADEFのスタッフ自身も決して楽ではない状況下において、シャンティを受け入れてくれました。被災地のど真ん中、復旧したばかりで混乱していたレイテ島タクロバン空港で初めて会った時から、最後の復興支援事業まで一緒に活動してきました。スタッフは事務局長をはじめとし、全員女性。女性ならではの気配りで、事業以外にもシャンティのスタッフの生活面まで面倒を見てもらい、何から何までお世話になりました。



タクロバン空港で初めてシャンティのスタッフに会ったとき、こんな状況で本当に一緒に活動ができるのか、正直不安でたまりませんでした。無事に調査を終え、そして緊急支援物資配布事業に入りましたが、大雨の影響やそれに伴う物資到着の遅れで、お互いにストレスを感じた時期もありました。その時、WESADEF・シャンティ両者がどのようにこの協働事業を考えているのか、じっくり話し合ったことを覚えています。

シャンティから派遣されたスタッフ5名(木村、白鳥、江口、東、長沢)とは本当に楽しい時間を過ごすことができました。ハイエンがなければ、出会うことがなかったし、日本人と一緒に働くこともなかったでしょう。日本からたくさんのご支援をいただき、東サマール州へ支援できたこと、被災地に代わって感謝します。

WESADEF 事務局長 Emma Elardo さんより



今回シャンティと一緒に事業をする中で、WESADEFとして支援をする価値を考えさせられました。通常は拠点を置く西サマール州内での活動のため、東サマールのような貧困地域の町と協力し事業を行うことは初めてで、さらに被災地支援であることから不安が大きかったが、やって良かったと思います。

日本人と働くのは初めてで、最初は戸惑う部分も多かったけど、一緒に活動する中で派遣スタッフとは冗談を言ったり、日本のことを教えてもらったり、楽しかったです。また、一緒に活動できることを心から楽しみにしています。

WESADEF マイクロファイナンス担当
シャンティ協働事業担当 Rowena Juanillio さんより

◆終わりに～担当スタッフより～◆



私にとって、緊急救援担当として初めての大自然災害対応となったフィリピン台風ハイエン。初動調査では治安の問題はもちろんでしたが、宿が見つからない、移動手段がない、電話が繋がらない等、本当に「ないないづくし」の中での活動となりました。悲惨な被災地の状況を目の当たりにし、悲しさがこみ上げてきましたが、フィリピンの方々はとにかく明るく「こんなところにわざわざ来てくれて本当にありがとう」と、いつも笑顔で私たちに接して下さり、私たちが元気をいただきました。

数か月に渡り支援したキナポンダン町では、村長さんをはじめとする村の方々、子どもたち、町役場の職員の方々に顔を覚えてもらい、町を訪れるたびに声をかけてもらえたのが本当に嬉しかったです。計画をたてても日々変わる状況にストレスを感じましたし、やりきれない思いでいっぱいになりましたが、町に行って被災地の方々に会うことが楽しみで頑張ることができたのだと思います。

WESDEFのスタッフとは、日が経つにつれて働く仲間から友達のような家族のような関係になり、2カ月間の長期滞在が終わり帰国するときには、次に会えるのはいつなのだろうと考え、淋しい思いをしたのを覚えています。数か月後にモニタリングで行ったときには、たくさんのフィリピン料理、カラオケ大会（現地ではビデオケ）、朝からビーチでバーベキュー、仕事終わりに事務所でダンスパーティーなど、楽し過ぎる時間を作ってくれました。

台風がなければきっと一生行くことがなかったサマール島ですが、私にとっては大事な思い出の場所となりました。最後にキナポンダン町長さんが言っていた印象な言葉をご紹介します。「この町は台風でたくさんのものを失いました。でも台風のおかげで世界からたくさんの人がこの町にやってきて私たちを助けてくれました。台風がもたらしたこの出会いは失ったものよりも大きいと思います」。

緊急救援担当 長沢有華

◆シャンティ緊急救援活動のあり方◆

当会の願い「共に生き、共に学ぶ」シャンティ（平和）な世界の実現のために、国内外の自然災害などの緊急事態に際し、以下の姿勢を大切にして救援活動に取り組んでいます。

① 地域に根ざした活動の展開

被災地域の地域性（文化・伝統・習慣・制度など）を尊重しながら支援活動を行います。そのため被災地域の団体や個人とも協働しながら支援活動を進めます。

② 人に寄り添い、より必要な人に必要な支援を

「与える支援」ではなく、「共に苦悩を分かち合い、解決策を一緒に考え行動する支援」を行います。被災者に寄り添いながら活動する中で、支援の届きにくい人々へ必要な支援を行います。

③ 子どもと住民の安心のために

特に災害弱者である子どもへの支援を重視し、図書館活動や学校建設など通常の教育支援活動で培った経験やネットワークを活かして支援活動を行います。また単なる応急処置の支援ではなく、中長期的視点から被災後の生活再建・地域復興につながる支援活動を行います。

◆フィリピン台風ハイエン 被災者支援活動 収支報告 ◆

事業期間：2013年11月～2014年8月末

I. 収入の部

区分	収入（円）
ジャパン・プラットフォーム（JPF）からの助成金	23,265,830
一般募金	10,860,604
(1)収入合計	34,126,434

II. 支出の部

※1 フィリピンペソ=2.4円計算

活動名（項目）	収入見込（円）
① 緊急救援物資の配布	1,037,377
② 家屋再建用資材の配布	19,019,487
③ デイケアセンター再建および修復（5村）	6,382,786
④ トラウマケアワークショップ（3村）	185,985
⑤ 事業共通経費（調査、現地 NGO 経費など）	2,060,991
⑥ 間接事業費（スタッフ滞在費、人件費など）	4,539,808
事業費合計	33,226,434
外部監査費用	900,000
(2) 支出合計	34,126,434

III. 収支差額

(3) 収支差額	0
-----------------	----------